

久住町内畑遺跡出土の土器

— 弥生時代前期の豊後内陸部の様相 —

渋谷 忠章

坂本 嘉弘

はじめに

昭和四十九年十月、大分県教育委員会は、久住町の遺跡分布調査を実施した。その際、久住町民センターに保管されている今回紹介する資料を見出し、出土場所である県立三重農業高校久住分校を訪れた。説明によると、同校の牛舎建設のため造成工事を行なった際に出土したという。

この分布調査以後、大野川流域では畑地帯総合土地改良事業に伴う発掘調査が開始され、それによって、大野川中・上流域の火山灰台地に無数の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡があることが明らかになった。これは、縄文時代晩期にこの地域に遺跡が集中するそれ以上のものである。ところがこの縄文晩期と弥生後期を結ぶ、弥生時代前・中期の遺跡が希薄であり、特に確実な弥生時代前期の遺跡は一ヶ所しかなく、この地域の縄文時代から弥生時代にかけて移行する状況は多くの問題が残されている。

ここで紹介する資料を出土した遺跡は、水系からみれば、大分川の上流域にあたる。しかし、大野川の源流の一部と同じ、九重連山の山麓に位置し、標高約五〇〇㍎の高原状の地形など自然環境が共通する部分も多く、大野川中・上流域に近接する

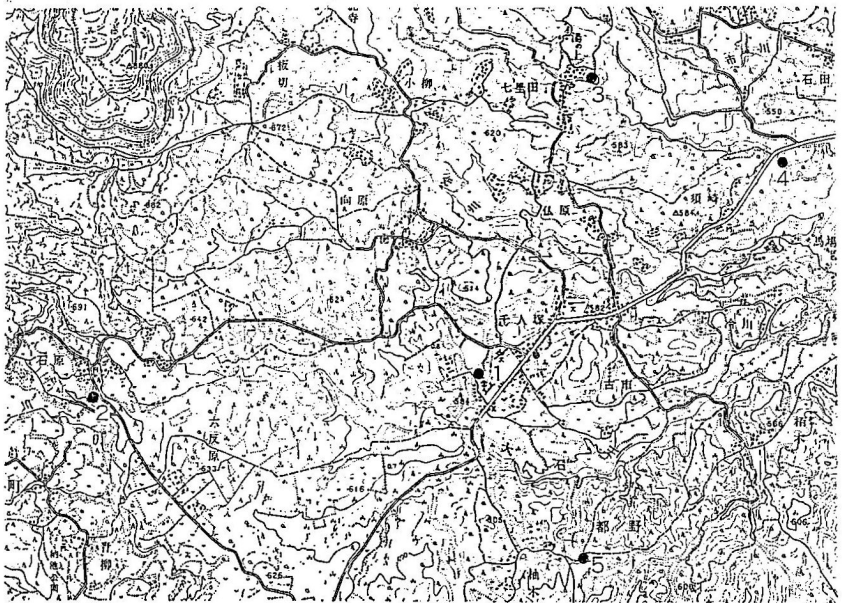
地域としてとらえられる。しかも出土した遺物は、大野川中・上流域に少ない弥生時代前期の資料である。このため、今後の、この地域での研究の参考になると思われる。

なお、資料紹介にあたり、遺跡名を三重農業高校久住分校遺跡から、小字名の内畑遺跡に変更した。

一、遺跡の立地と環境

本遺跡は、九重連山のひとつである大船山のふもと、標高約五八〇呎の高原状の景観を呈する地形の中に立地する。微視的にみれば大分川の支流である芹川の上流、冷川と大石川に挟まれた、東西に延びる台地上にあたる。現状は、この両河川に沿って水田が広くみられるが、台地上は畑地か草原、山林が主体となっている。

周辺には、直線距離で二詰北方に、主体部が箱式石棺の円墳である湯ノ上古墳⁽¹⁾、また、東南一詰には縄文時代後期の柚木遺跡がある。そして東北一詰の地点には、横穴墓である須崎横穴群、さらに、西方三詰には弥生時代中期から後期の遺跡である石原遺跡がある。この遺跡は、大野川との分水嶺となる尾根状の台地に立地し、磨製石鏃や石剣、



第1図 遺跡位置図

- | | | |
|--------|--------|---------|
| 1 内畑遺跡 | 2 石原遺跡 | 3 湯ノ上古墳 |
| 4 須崎横穴 | 5 柚木遺跡 | |

石包丁など多くの遺物を出土している。⁽²⁾その他、弥生時代の遺跡は、九重連山南側の久住高原に多く散在し、各所で弥生土器片が採集されている。また久住高原を流れる大野川の源流の田町川流域の建官付近からは、銅戈が三本出土しており注目される。

このように標高五〇〇以上の高冷地にかかわらず、久住町には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く見られる。

二、出土土器

採集・保管されている遺物は土器のみである。造成中に採集されたため、遺構内のものか、包含層の遺物かは不明である。総点数は83点で、口縁部7点、底部3点である。器種別にみた場合、壺形土器と甕形土器の二種類がある。

(1) 壺形土器 (1~8)

1、復元口径は8.5寸の口縁部の破片である。口縁端部は丸く仕上げられ、内面から口縁部の外面屈曲部までヨコ方向のヘラ研磨で、屈曲部から頸部にかけてはタテ方向のヘラ研磨である。黄褐色で黒色の微砂粒を含む。

2、復元口径は12寸で、口縁端部は角ばっており、下端は稜が生じている。また胴部との接合部には沈線文がある。器面は、内面の一部を除きヨコ方向のヘラ研磨で仕上げられている。胎土には石英粒が多く、内面の粗雑な器面調整の部分では露出している。黄褐色。

3、大形壺の破片と思われる。口縁部は若干肥厚し、端部はとがる。内面から外面にかけてはヨコ方向のヘラ研磨でそれに続く外面はナデで器面調整されている。黄褐色である。

4、肩部の小破片である。頸部と胴部の接合部に小さな段があり、浅い沈線文も認められる。外面はヘラ研磨で、暗茶色を呈する。

5、同じく肩部の小破片である。浅い不明瞭な平行沈線が二条認められる。胎土に石英粒を多く含み、内面は粗雑な仕上げの

ため砂粒が露出している。暗黄色を呈する。

6、頸部の破片である。胴部との接合部には沈線による複雑な文様が認められる。外面はタテ方向のヘラ研磨、内面も他に比較すると丁寧な仕上げである。暗茶色で胎土に砂粒は少ない。

7、復元径6㍍の底部の破片である。やや上げ底気味になり、接地部は磨滅している。外面はヨコ方向のヘラ研磨で仕上げられている。淡茶色で石英粒を多く含む。

8、復元径8㍍の底部の破片である。7に比較すると厚く、全面が接地する。しかし、色調や、胎土に石英粒を多く含むのは類似する。

(2) 甕形土器(9~20)

甕形土器は、いずれも縄文晩期の刻目突帯文土器の伝統を残したものであるが、刻目や形態、器面調整に弥生的手法が認められるもの(甕形土器I類9~12)と、より強く縄文晩期土器の伝統を受けたもの(甕形土器II類13~19)の二者が認められる。

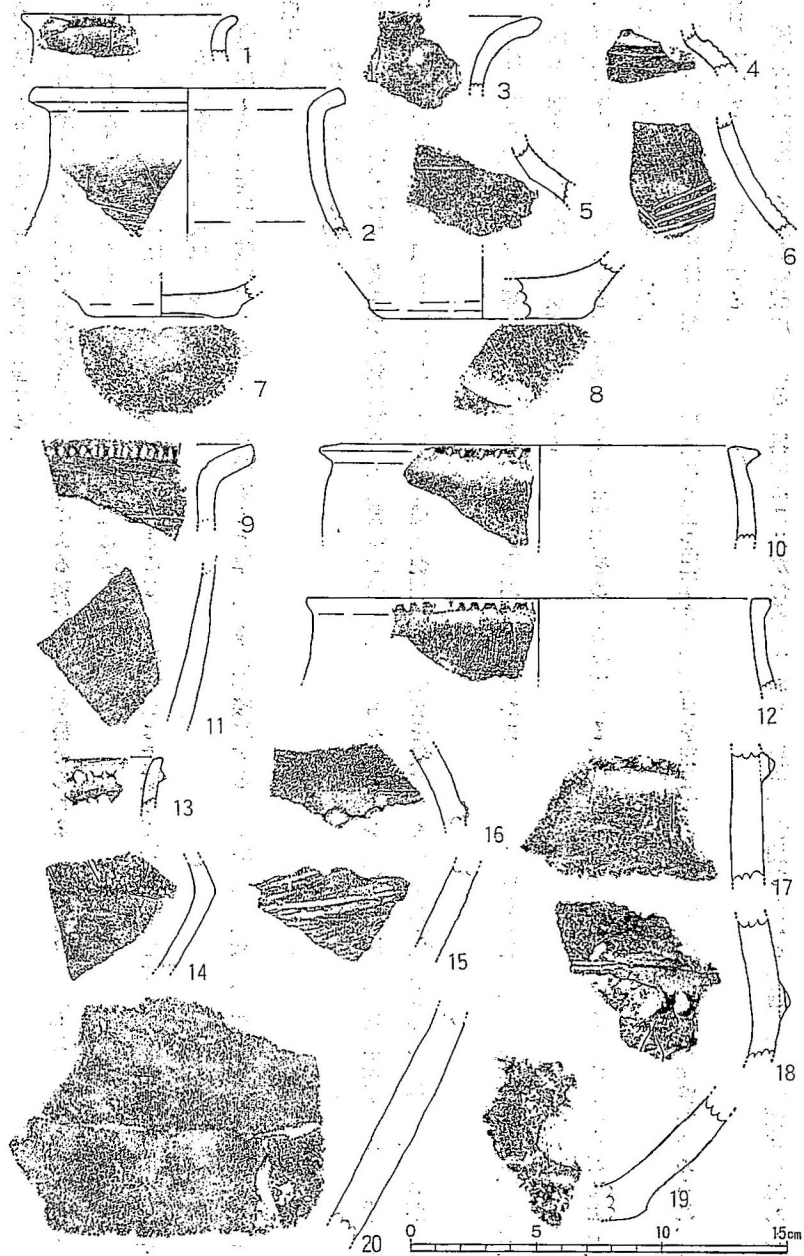
9、板付式系の如意状口縁の甕形土器である。口縁部下端に刻み目があり、胎土には石英粒を多く含む。器面は、ヨコ方向のナデ仕上で調整されており、淡茶色を呈する。

10、復元口径15㍍で、内湾する口縁部外面に刻目突帯をめぐらせている。内外面、ヨコ方向のナデで仕上げられており、明茶色で、胎土に石英粒を多く含む。

11、復元径17㍍で、口縁部は内傾し、口縁端部外面を肥厚させ、刻目を施している。外面には刷毛目調整が認められ、ススが付着している。暗茶色を呈する。

12、刷毛目調整のある胴部の破片である。器面にススが付着しており、胎土、色調など11と共通し、同一個体と思われる。

13、口縁部の外面に刻目突帯がめぐる。口縁端部は角ばっている。器面はヨコ方向のナデ調整で、暗茶色を呈する。



第2图 内畑遺跡出土土器実測图

14、稜を生じて屈曲する胴部の破片である。外面は、ヨコ方向のヘラ研磨で調整され、黒色斑が認められる。胎土に砂粒は少ない。

15、ヨコ方向の条痕が認められる胴部の破片である。茶色を呈し、内面にはススが付着する。

16、太い刻目のある胴部破片である。ヨコ方向のナデで仕上げられている。茶色を呈する。

17、16と同様であるが突帯が高く、刻目は浅い。器面のナデ調整も粗雑である。

18、肩部は一条の太い刻目のある土器で、器面は、ヨコ方向の条痕の後、ナデ仕上げされている。

19、底部の破片である。内外面ともナデで仕上げられており、接地面は磨滅している。

20、胴部であり、器面はナデにより平滑に仕上げられている。17、20の土器片には、胎土に軽石状の細かい粒を多量に含まれている。

以上が主要な土器片の概略である。採集総点数83点と少ないがその内容を見ると、確認できる壺形土器と甕形土器Ⅰ類の数はともに約10点でほぼ同率であり、甕形土器Ⅱ類は29点が認められる。これらの土器には前後する弥生時代中期、縄文時代晩期の土器が含まれない。しかも、壺形土器と甕形土器Ⅰ類をみた場合、口縁部の形態や文様にバラエティがあるものの、弥生時代前期後半にみられる範疇に含まれる。このため、甕形土器Ⅱ類と分類した土器のみ、他より古式とは考えられず、やはり前期後半が妥当である。時期差があるとすれば、前期後半の中の差であろう。このように、内畑遺跡出土の一群の土器は量的には少ないが、弥生時代前期の限られた一時期と考えられる。

三、考 察

久住町内畑遺跡の遺物は土器のみであるが、最後にこの土器の編年的な位置づけと、土器からみた、弥生前期の大野川流域を含むこの地域の地域性を考えて、まとめたい。

現在、大分県内から出土した弥生前期の資料は宇佐平野を中心とする豊前地方や、筑後川上流域の日田盆地などで、まとまった資料が報告されている。⁽⁵⁾ また、大分平野でも大分市雄城台遺跡で弥生時代前期から古墳時代に至る集落が調査されている。これらは全て弥生前期後半から末期の資料で、板付Ⅱ式土器の系統の壺形土器とそれに伴う、それぞれの地域で特色のある甕形土器が出土している。

一方、弥生土器の象徴ともいえる壺形土器の系譜を遡れば、現在大分県で最古のものは、竹田市小園遺跡から出土している。⁽⁶⁾ それは、口径10 cm に未たない小形壺であるが、口縁部は短かく外反し、肩部内面に明瞭な接合痕がみられ、以後の壺形土器の要素をそなえている。これに伴う他の土器は、刻目突帯文のある深鉢形土器と黒色に研磨された浅鉢が出土している。前者は、小形の深鉢で、胴部で屈曲し外面に稜が生じている。口縁部は内傾し、外面に一条の刻目突帯がめぐる。器面は条痕のあと、などで仕上げされている。後者の浅鉢は縄文晩期の伝統である研磨技法を強く残している。その系譜は上菅生B遺跡など、刻目突帯文土器出現直前にみられる、胴部が丸く張る浅鉢形土器の系統を引くと思われるもので、⁽⁷⁾ これに比較すると胴部は張るものの偏平になる。口唇部のリボン状突起は残っている。⁽⁸⁾

次に古く考えられるのは、挾間町下黒野遺跡出土の土器である。この遺跡からは、包含層からの出土であるが、まとまった資料が出土している。壺形土器は丹塗りがされており、口径一五 cm 以下の小形壺と、二〇 cm 以上もある大形壺がある。口縁部は短かく外反するものの小園遺跡のそれに比較すると若干肥厚しており、端部は丸く仕上げられている。器面は外面へラ研磨で、内面はあまり手を加えられてない。これに伴う土器は、刻目突帯のある深鉢や、浅鉢・鉢形土器などがある。刻目突帯文の深鉢は突帯をめぐらず位置や刻み目にバラエティがある。器面は、ヨコ方向の条痕文で調整されているが、胴部の屈曲部から上位はヨコナデで消されている。浅鉢は、小園遺跡でみられた偏球状に胴部が張るものから系譜がたどれると思われる。胴部は鋭どく稜を生じて屈曲し、その屈曲部には刻目が施されるものもある。また、口唇部のリボン状の突起の名残とも考えられ、小さな高まりも認められる。しかし、黒色に焼成され光沢が出るほど研磨される縄文晩期以来の浅鉢の伝統は失なわれ、器面

は胴部の屈曲部より下位は条痕、上位はナデにより仕上げられている。この下黒遺跡から出土した土器の底部は、約10点あるが、いずれも、粘土の輪を貼り付けたような高台状の上げ底になっている。

以上が縄文晩期後半の刻目突帯文土器に伴う壺形土器であるが、次に古く、そして弥生時代最古の壺形土器として従来考えられていた土器に武蔵町内田遺跡出土の2点の壺形土器がある。⁽⁹⁾ いずれも小型壺で、刻目、突帯文土器に伴う壺形土器に比較すると口縁部は大きく外反し、しかも肥厚気味になり、頸部との接合部には小さな段が生じている。また頸部と胴部の接合部には低いベルト状の粘土をめぐらせているものもある。底部は、下黒野遺跡ほどではないが弥生前期末の壺形土器に比較すると著しい上げ底になっているものもある。器面は頸部はタテ方向、胴部はヨコ方向に入念に研磨されている。内田遺跡出土の土器は、埋葬遺跡のためか、他の伴出遺物がなく、編年的に位置づけるには資料が乏しい。しかし、土器の形態から、これまで、板付Ⅰ式土器に対応させ、弥生前期前半に位置づけられてきた。⁽¹⁰⁾

そして弥生期末に編年されているのが、宇佐市台ノ原遺跡出土の台ノ原Ⅰ式である。⁽¹¹⁾ これは北部九州の板付Ⅱ式土器の系統を引く土器に在地性の強い、刻目突帯文土器の最終末形態ともいえる。下城式土器の甕形土器を加えたものである。壺形土器は、口縁部が大きく外反し、胴部最大径は上位にあり腰高な器形である。そして頸部や、肩部に数条の沈線がめぐる。また、北九州や山口地方の直接的な影響と思われる、放射肋のある貝殻腹縁を刺突し文様化した土器もみられる。甕形土器は、板付Ⅱ式土器の如意状口縁のものと、下城式でも最古式に属する、口縁部が内湾し、外面に刻目突帯がめぐるものが目立つほか、この両者の折衷形態と考えられるものも存在する。

このような土器群の中で、内畑遺跡の土器をみると、壺形土器は、口縁部の外反度は内田遺跡のそれより小さくむしろ下黒野遺跡のそれに近い。しかし底部の形態や、伴出した甕形土器は、新しい傾向を示す。すなわち甕形土器のりは、如意状口縁の口縁下端部に刻み目を施す、板付Ⅱ式土器の特徴的な形態を呈している。また、¹⁰に類似する土器は台ノ原Ⅰ式土器の中にみられる。さらに同一個体と考えられる11・12は器面が刷毛目調整されており、明らかに弥生時代のものといえる。そこで、

内畑遺跡の時期であるが、立地する位置が内陸部にあたるため、壺形土器の形態変化が停滞し、古式様相を残していると考えられる。そして板付Ⅱ式土器の壺形土器があることから、大きくは弥生前期後半に位置づけられる。しかし2・6などの壺形土器の頸部にある文様や、4の肩部の明瞭な段などは、台ノ原Ⅰ式土器には認められず、これより古式に属すると思われる、弥生前期後半の古い時期と考えたい。そして最近報告された熊本県の斎藤山貝塚⁽¹²⁾などとほぼ同時期と思われる。

次に、出土土器から、この地域と隣接する大野川中上流域の地域性を考えてみたい。まず注目されるのは壺形土器Ⅱ類とした他の土器に比較すると厚味がある。この土器は当遺跡には器形を復元することはできないが、大野町駒方B遺跡、竹田市小高野遺跡⁽¹³⁾から同類の土器が出土している。それによると、胴部は緩く屈曲し、口縁部にかけて内傾し、口縁部は外反気味になる。そして、口縁部と胴部の屈曲部の二ヶ所に、刻目突帯文が数条めぐり、中にはこの突帯間を格子状や山形に沈線や突帯でつなぐ文様もみられる。器面は15のように条痕文をそのまま残しているものもあるが、大部分は条痕文をナデ消している。色調も暗く、海岸部の弥生土器が明茶色や明褐色であるのに対し、器壁も厚く暗茶色のものが多い。この器形や文様構成は、縄文晩期後半に出現する刻目突帯文のある深鉢形土器にその直接的な祖形を求めることができる。内畑遺跡における、この土器の存在はこれまで、駒方B遺跡や小高野遺跡など、埋葬遺跡の壺棺として利用されていたものを含め、弥生前期後半まで残るところを提示するものである。

ところで、縄文晩期後半に出現する刻目突帯文土器の系統として、今日まで考えられている壺形土器に、亀ノ甲式土器と下城式土器がある。両者とも弥生前期末に出現すると考えられ、それぞれ九州西北部と東部に分かれて展開することが指摘されてきた。⁽¹⁴⁾ところが、内畑遺跡の壺形土器Ⅱ類としたものや、駒方遺跡のものは、亀ノ甲式や下城式土器より、器形・刷毛目調整がないなど、さらに強く刻目突帯文的色彩を残すものである。しかも時期的にみて、ほぼ同時期と考えられる。このため大野川中・上流域や、阿蘇・九重連山周辺などの九州内陸部にあたるこの地域には、従来考えられていた、亀ノ甲・下城式土器⁽¹⁵⁾よびさらに刻目突帯文土器の伝統を残す壺形土器を使用する地域があったことが想定される。

大野川上・中流域は、賀川光夫の縄文晩期農耕論の論拠となつてゐる地域として知られてゐる。そこでこの地域の遺跡の増減をみると、縄文後期後半からしだいに遺跡数が増し、縄文晩期前半に、ひとつのピークを向え、一〇〇ヶ所に近い遺跡が確認されている。各台地には必ず、遺跡があるという状況である。しかし刻目突帯文出現期以降、除々に遺跡数が減少し、弥生前期の遺跡はあまり確認されていない。この時期は、北部九州に稲作が伝播する時期にあたり、より合理的な、生産性の高い食料確保のために、低地への人々の移動があつた可能性も考えなければならぬだろう。そして残された数少ない遺跡のうちのひとつが、今回紹介した内畑遺跡であるが、その土器にみられるようにこの地域が縄文晩期に九州有数の隆盛地であつたため、その伝統を強く残す土器が存在したことを示している。

ところが、弥生後期になると、再び、この大野川上中流域では遺跡が激増し、縄文晩期以上の隆盛地となる。その背景には本格的な稲作の伝播があつたと思われるが、出土する甕形土器に海岸部に類例のない特徴的なものである。すなわち、胴部に工字状突帯や櫛描文をめぐらすもので、器壁が厚く、器面調整には、全く刷毛目調整を用いない。器形は長胴で、底部は尖底である。この甕形土器の系譜は現在、下城式土器に求められている。しかし、器壁の厚さや胎土、器面調整は下城式土器とは異なり、むしろ、これらの特徴は今回甕形土器Ⅱ類としたものや、小高野遺跡・駒方B遺跡のものに類似する。そこで、弥生前期後半に存在する、この種の土器が、中期に小形化と、口縁部の外反や刻目の喪失など形態変化をとげ、後期の甕形土器へと続くとも考えられる。

なお弥生後期の甕形土器の器形や相様が、海岸部と異なるのは、縄文晩期以降の伝統だけに左右されたものではなく土器作りの際の材料、調理の対象となる食料が異なるためとも考えられる。

以上、久住町内畑遺跡の資料紹介と、それに伴う問題を論じた。しかし、資料不足はまぬがれず、ここで論じているのはひとつの仮説にすぎない。その証明は、今後、筆者たちがこの地域で調査をしてゆくうえで考えてゆきたい。

註(1) 「湯ノ上古墳」久住町教育委員会 昭和四四年

(2) 坂本嘉弘・讚岐和夫「直入郡久住町石原遺跡採集の遺物」(大分県地方史第九一號) 昭和五三年

(3) a 後藤宗俊・清水宗昭・真野和夫ほか「合ノ原遺跡」大分県教育委員会(大分県文化財調査報告第三三輯) 昭和五〇年

b 坂本嘉弘「宮ノ原遺跡」安心院町教育委員会 昭和五七年

(4) 村上久和「吹上遺跡Ⅰ・Ⅱ」日田市教育委員会 昭和五五・五六年

(5) 昭和四六年から大分県教育委員会により七次にわたり調査され、現在整理中

(6) 村上久和ほか「菅生台地の遺跡Ⅲ」竹田市教育委員会 昭和五二年

(7) 高橋徹「大分県考古学の諸問題(一)——刻目突帯文土器の出現とその展開について」(大分県地方史第九八号) 昭和五五年

(8) 清水宗昭・渋谷忠章ほか大分県教育委員会「下黒野遺跡」(大分県文化財調査報告書) 昭和四九年

(9) 明僚な実測図は今日まで公表されていないが賀川光夫編「大分の歴史Ⅰ」の付録に写真が提示されている

(10) 注(3) a 及び賀川光夫「大分県の考古学」昭和四六年で論じられているが、形態的にみた場合、板付Ⅰ式より新しい可能性が強い。

(11) 注(3) a に同じ

(12) 西健一郎「斉藤山遺跡出土刻目突帯文土器の再検討」(九州文化史研究所紀要第二十七号) 昭和五七年

(13) 駒方B遺跡は昭和四九年大分県教育委員会・小高野遺跡は昭和四七年別府大学によりそれぞれ調査され、現在整理中

(14) 注(3) a や小田富士雄「入門講座弥生土器——九州?——」(考古学ジャーナル77) 昭和四八年

(15) a 中島直幸「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農具」(歴史公論通巻74号) 昭和五七年

b 山崎純男ほか「板付遺跡調査概報」(福岡市教育委員会福岡市文化財調査報告書第四九集) 昭和五四年

(16) 牧尾義則ほか「菅生台地と周辺の遺跡Ⅱ」竹田市教育委員会昭和五二年の中の結語で鳥養孝好氏が述べている。また高橋徹・高橋信武

「萩台地の遺跡Ⅳ」萩町教育委員会昭和五四年で高橋徹氏によりさらに具体的に論じられている。

(渋谷) 大分市城南西町尼ヶ域ハイツ二十七号・県文化課主任、坂本) 大分市敷戸西町一〇一—一四〇一県文化課主任)